2009.12.7 読了。
2009.11.7(火) 朝刊

第3種郵便物認可

文化

「用の美」デザインと共鳴

いまを生きる 民芸 下

パリのケ・ブランリ美術館は今年初めまで、民芸を紹介する「日本の民芸精神」展を開いていた。その監修者ジェルマン・ビアットさんは開催中にこう話した。「『ミンゲイ』の精神は、最近フランスで人気の高い『無印良品』のデザインなどにも通じる」

現代的で都会的な無印良品と、大正時代に柳宗悦によって唱えられた土着的な民芸の品々。だが、確かに無印良品やユニクロの雑貨や衣服などは、民芸と通じる面がある。実用性、無名性、シンプルなデザインなどだ。

無印を世に出した、作家・詩人で元セゾングループ代表の辻井喬（堤清二）さんも「無印良品を始めるとき、近親性のあるものとして民芸も意識した」と話す。

「無印良品は反ブランド商品と考えたし、『無銘性』という意味では、民芸とも通じる。一方で、市場経済の産物であることも事実。『無印』というブランドとして扱われる危険性もあり、民芸との重なりは4割程度でしょう」

一歩進み、「民芸こそデザインの考え」ととらえるのは、プロダクトデザイナーの深澤直人さんだ。シンプルで端正な品々で知られ、無印の商品も多く手掛けている。

「特別で刺激的な形を生むのがデザインと見られがちだが、柳が唱えたような、普通の生活にある『用の美』ととらえるべきだ。デザイナーの名前や過剰な商品情報によって目が曇りそうなときに、要になる存在だ」

近代以降、絵画や彫刻などの美術は「用」を離れ純粋性を求めてきた。一方、器や染織など、作家が「用」を保ちつつ「美」を追求してきたのは、近代工芸だ。それに対して、前近代的・近世的ともいえる無名の職人による手仕事の中に、「用の美」を見、民芸と名づけたのが柳だった。

美術評論家の北澤憲昭さんは「工芸は、美術の側にも工業製品の側にも行けないあいまいさがある『用と美』だが、民芸と近代のデザインは『用の美』で重なり合う」とみる。だから「民芸は工芸というより、近世の手仕事に関するデザイン思想ではないか」という。

濱田琢司・南山大学准教授も、シンプルで無名性の高いデザインは「民芸の本質に近い部分がある」としつつ、手にしたときの喜びといった、心にかなう「用」も民芸の重要な一面だと考えている。

都会の知識人で目利きだった柳が、地方の品々をさほど文脈を意識せずに称揚したことに、異国趣味的だという批判も成立する。一方で「（言葉や知識より）モノを基準にしてきたことで、民芸はしがらみや時代を超えやすかったのではないか」と濱田さん。

環境保護への意識が高まり、浪費に厳しい視線が注がれる今、無印良品の生みの親である辻井さんは「グローバリゼーションの中、地域を大切にする民芸が有効になる」と指摘する。深澤さんは「バブル崩壊はいわば神の啓示であり、過剰さを排した民芸的な『さりげなさ』が共感を呼んでいる」と語る。

柳は、「見テ　知リソ　知リテナ　見ソ」と説いた。まずモノを見て知れ、知ってから見るな、という意味だ。このモノに即した柔軟さゆえに、民芸は今後もさまざまに読まれていくのだろう。

（大西若人、西田健作）

㊤無印良品の食器。無銘だが、著名なデザイナーが手がけた商品も多い＝東京都千代田区㊦パリのケ・ブランリ美術館の「日本の民芸精神」展

黒板

▲第13回日本ミステリー文学大賞（光文シエラザード文化財団主催）　北方謙三さんに。賞金300万円。同大賞新人賞は東京都の会社員両角長彦（本名・岡本岳彦）さん（49）の「ラガド」に。賞金500万円。贈呈式は10年3月16日、東京・丸の内の東京会館で。